

最終章

明日への舞台

【音二郎／現代エンド】

門をくぐると、朱色の本堂の真上に赤い満月が昇っていた。まるで月の光そのものが、本堂を朱に染めているようにも見える。本堂の両脇に鎮座するのは、狛犬ではなく狛虎だ。なんでも毘沙門様は寅の年、寅の日、寅の刻にこの世に降臨されたとかで、この狛虎はそれにちなんでいるらしい。

——私は誰かを探していた。大切な約束を果たすために。

「やあ、芽衣ちゃん」

「っ！」

背後から私の肩を叩いたのは、チャーリーさんだった。

「はは、驚かせてしまったようで悪かったね」

「ほ、ほんとにびっくりした」

でも、まさかここで会えると思わなかった。いくらチャーリーさんの格好は悪目立ちするといっても、こんな人混みのなかではさすがに見つけづらいと思ったから。

「で、誰を探していたのかな？」

「え？」

「僕は君と、満月の夜に日比谷公園で待ち合わせしていたはずだ」

「でもおかしなことに君は今、僕との約束とは違う場所にいるようだからね」

(あ……)

「もしかしたら君は、誰か別の人と約束でもしていたのかな？　と思ったんだよ」

(違う、そうじゃないの。チャーリーさん)

私はただ、人の流れに飲み込まれてしまったただけだ。でもなにを言っても言いわけのようになってしまう気がして、私は押し黙った。

「その人は、君にとって大事な人なのかな？」

なおも彼は、その話題で食い下がってくる。

「さあ、よく考えて。これは大切な質問だよ？」

「君にとってその人は、現代での生活よりも大切なものなのかな？」

「それは……」

「……よくわからない」

実はまだ迷ってる。

現代に帰らなきゃ……と思いつつも、この時代に心残りがあるのもたしかだ。

「……へえ？　あんなに帰りたいた言っていたのに？」

そう、私はつい最近まで、自分が現代に帰ることを選ぶと信じて疑わなかった。

(でも、どうして……帰らなきゃいけないと思うんだろ?)

家族や友達が待っているから？

生まれ育った世界だから？

すべてを捨てるのは無責任だから――？

(じゃあ、私を好きになってくれたあの人を置いて帰ることも、無責任なんじゃないの？)

私がいなくなったら、あの人はどう思うんだろう。

私がないこの世界で、私のことを探し回ったりするのかもしれない。

まさか私が違う時代に帰ったとは思わないだろうから。

(――そんなことさせたくない)

私を必要としてくれるなら、そばにいたい。

「誰か、大切な人ができた？」

私はうなづいた。まぶたの裏が熱くなる。

「その人と離れたくないんだね」

もう1度、うなづいた。

たったそれだけの理由で私はここから動けずにいる。私がもう少し大人なら、きっとこんな気持ちに振り回されたりしないのかもしれない。

「それなら、離れなければいいよ」

チャーリーさんは難なく答えた。

「離れたくなければ、離れなければいい。おそらくその人も君と同じことを思っているはずだ」

「……そんなのわからない。簡単に言わないで」

「いいや、簡単な話さ」

「どんなに大がかりなマジックでも、タネあかしをしまえば仕掛けなんて拍子抜けするほど簡単なものなんだよ」

「……？」

説得力があるような、ないような。よくわからないたどえだった。

「信じられない？　じゃあ、これからすごいマジックを見せてあげよう」

「え？」

「芽衣ちゃんだけの特別サービスだ。今から、ここに君の大切な人が現れるからね」

「なに言ってるの」

そんなはずない。現れるわけがない。

「心配しなくても大丈夫だよ。明治だろうが現代だろうが、どこにいたって彼は君のこ
とを大切にしてくれるはずだから」

「チャーリーさんっ」

だんだんと喧噪が遠のいていく。人々の笑い声も、風が木々を揺らす音も。

*

——赤い月だけが、暗闇を照らし出す。

(チャーリーさん)

私は何度も呼びかけた。

(教えて。あなたは誰なの?)

その問いに答える代わりに、彼はニヤリと道化師のような笑顔を浮かべた。

「幸せになるんだよ、芽衣ちゃん」

ぱちんと、大きく指を鳴らした。

*

「芽衣？」

（え？）

「どうした、ぼんやりしやがって」

私の目の前に、音二郎さんがいる。遠のいたはずの喧噪とともに、音二郎さんが私の視界の中へと帰ってきてくれた。

（あれ？ チャーリーさんはどこ？）

きよろきよろと周囲を見回しても、あの薄い笑みを浮かべた奇術師を見つけることはできない。

まるで最初からそこにいなかったように、気配の欠片も残してはくれなかった。

「なにはぐれてんだよ。ずっと探してたんだぜ？」

「……私だって」

ずっと探してた。

途中で迷って、何度も悩んで、しばらく選べずにいたけれど。

やっぱりこの人の元にたどり着いてしまった。

「ほら、手エ貸せよ。またはぐれたら面倒だろ」

音二郎さんは苦笑しながら右手を差し出してきた。その手を握り返すと、彼は人の流れとは逆の方向へと歩き出していく。

(どこに行くんだろう?)

まるで目的地が決まっているみたいなのに、音二郎さんの足取りには迷いが無い。やがて、小さな子どもたちが私たちを追い越していく。彼らの手には赤い風車。風を受けてめまぐるしく回っている。人混みを縫うように走り抜け、彼らはやがて見えなくなった。

「……どこに行ったんでしょね？」

「そりゃあ、自分の家に決まってる」

当然だろと言わんばかりにそう答えた。

「祭りの時間はそろそろ終わりだ。祭りが終わればみんな家に帰るだろ」

(そっか……)

「名残惜しいか？」

私は、来た道を振り返った。提灯のあかりが彩るお祭りの会場は、いつのまにか遠くに離れてしまった。来た道を戻ろうと思えば戻れるけど、あとに残るのは一番にぎやかで楽しかった頃のお祭りの残滓だけ。

「……いいえ」

名残惜しい気持ちごと、このまま家に持ち帰る。私は前を向き直った。

「じゃ、そろそろ帰るか」

「はい」

(帰りたい、音二郎さんと一緒に)

あの子どもたちのように風を受けて、この道のはるか先まで。

「……もう、見失わねえからな」

見失わないで。行き先は、たった1つだから――

*

――まぶたの向こうに、やわらかな光を感じた。ざわざわと人の気配。子どもたちの笑い声。

(ここは……)

私は、この場所を知っている。あれは、今からちょうど1カ月前――

「さあ、お立ち会いお立ち会い！ 手前ここに取り出ししたる陣中膏はこれ、ガマの油。ガマと言ってもそんなじよそこらのガマとは物が違う！」

「ハイご通行中の皆様、容貌奇妙にして珍妙なるこの娘、親の因果が子に報い、生まれ出たるはへび女！ お代はあとで結構だよ、ハイ入って入って〜」

——私が明治時代に飛ばされてしまった、あの夜に訪れた縁日だ。

そして私の隣には、音二郎さんがいる。

彼は私の手を握りしめ、すでになにかを悟ったような顔で、私を見下ろしていた。

(どうして、ここに……?)

ただ1つわかるのは、ここは現代だということ。

どうやら私と音二郎さんは、チャーリーさんの不思議なマジックによって、2人一緒に現代へと飛ばされてしまったらしい。

*

そして現代に帰ってきた私は、チャーリーさんの言葉どおり、すべての記憶を取り戻していた。

私は東京都のとある普通高校に通う、女子高生だ。成績は中の中、多くはないけど少なくともない友達に囲まれ、平凡な高校生活を送っていた。家族構成は、両親と妹が1人。親は骨董品屋を営み、私は幼い頃から古いものに囲まれて育った。飴色の茶箆筒に細竿の三味線、紫壇の文机。切子細工のガラスの灰皿。そんな古いものの匂いや手触りが大好きだったことを、現代に帰ってきてから思い出した。

*

——それから1年後。

音二郎さんは現在、舞台役者の注目株として慌ただしい毎日を送っている。全国公演で日本中を駆け回る生活サイクルは、実は明治の頃とあまり変わりはないかもしれない。会えない日が続くこともめずらしくなかったけど、テレビや新聞でその活躍を知ることができたから寂しくはなかった。

そんな私のもとにある時、音二郎さんから嬉しいニュースが飛び込んできた。なんと

『夜叉ヶ池』が明治座で上演されることになり、その主演を音二郎さんが務めることになったのだった。同じ劇場で、同じ作品の同じ役を、まさか現代に生きる音二郎さんが再び演じることになるなんて思いもしなかった。

——音二郎さんはもう、明治時代には帰らない。

泉鏡花という作家の作品を、川上音二郎という役者が時代を超えて受け継いでいく。この不思議な符合の行く末を、客席の最前列で見守るのが——私の役目だ。

*

「……あいかかわらず、でっかい舞台だよなあ」

そう言って音二郎さんは、舞台の上から誰もいない客席を眺め、感慨深げにつぶやいた。明日からここ明治座が始まる『夜叉ヶ池』の舞台。

さつき最後のリハーサルが終わり、今はこうして、見学に来た私と音二郎さんだけが舞台に残っている。

「芝居をやり始めたばかりの頃は、まさか自分が明治座の舞台に立てるとは夢にも思わなかったぜ。……えー、こほん。♪権利幸福嫌いな人に、自由湯をば飲みたい、オツペケペ、オツペケペ、オツペケペツポー……つてな」

「ふふ、なんですか、それ」

私の問いかけに、音二郎さんはニヤリと笑った。

「昔はボロい小屋でこんな歌うたいながら、お上に噛みついてばかりの毎日だったんだ。そんな俺が役者として舞台に立って、鏡花ちゃんと出会って、おまえに出会って……」

音二郎さんはそこで1度言葉を切ると、再び舞台から、ゆっくりと客席を見渡す。

「まさか時代を超えて、もう1度『夜叉ヶ池』を演じることになるなんてよ。さすがの鏡花ちゃんだって、こんなこと信じねえだろうなあ」

「……いよいよ明日ですね」

私が舞台に立つわけじゃないのに、なんだかドキドキが止まらない。私は音二郎さんの隣に並び、そっと自分の胸に手をあてた。

「ああ、いよいよ……だな。何度も演じた役とはいえ、舞台に立つたびに緊張するんだよなア」

（そっか……音二郎さんでも緊張することがあるんだ……）

いつも堂々としている人だから、そんな様子はみじんも感じたことがなかった。

「……あ！ そうだ。おまえにすげえ秘密を教えてやろうじゃねえか」

「秘密、ですか？」

音二郎さんは、ちよつともったいぶったふうに口の端を上げ、靴の踵で舞台の床を踏みならした。

「いいか、びっくりするなよ？なんとこの舞台……自動で動くんだ！ すいっち、っていう突起を押すとよ、この床が勝手にぐるぐる回転しやがるんだ。どうだ、すっっっげえびっくりしただろ？」

音二郎さんは子どものように瞳をキラキラさせて、その『秘密』とやらを教えてくれたけど。

「ええと……」

「ん？」

「それは現代では、わりと普通かと……」

「……おいおい、本当かよ？俺はこの仕掛けを初めて見た時、正直、腰を抜かしたぜ？あつちにいた頃は、電気なんざとおってねえ小屋ばかりだったからな。なにをするにも人力だ」

音二郎さんはそう言って、少しだけ懐かしそうな表情になる。

「——でもよ。100年近く経って舞台の仕掛けは変わっても、舞台をやりてえやつがたくさんいることに変わりはないんだよな。ほかにも娯楽は山ほどあるのに、舞台を観に来る客もたくさんいるし、この明治座だってしっかり残ってる。たぶんこれから100年経っても変わらねえんだろうなって思ったら、なんだか不思議でさ……」

音二郎さんは、『わかるか?』という表情で私を見下ろした。

もちろん、わかる。だって私も、あの時代にいたのだから。そしてこの時代に来て、音二郎さんが芝居を続けてくれていることがなによりも嬉しい。

「……明日はおまえのために最前列の席を取ってあるからな。もちろん、ちゃんと観にくるよな?」

「最前列、ですか?」

こんな大きな劇場の最前列なんて、たぶん生まれて初めての経験だ。ますます緊張が高まってくる。

「すごく嬉しいんですけど、最前列は緊張するとか恥ずかしいとか……」

「恥ずかしい、だと?」

音二郎さんは私に1歩近づくと長い腕を伸ばして、私の腰を抱き寄せた。

「わっ……、あのっ」

ぎゅっと包まれた、力強い腕のなか。その胸板に頬があたり、私の鼓動はますます加速していく。

「いつもこーんなに近くににいるのに、恥ずかしいってのはどういう見なんだよ」

音二郎さんは優しい声で、私の耳元に語りかける。

「そ、それは……」

「最前列だったって、なにもこんな距離で演じるわけじゃねえ。もっともっと離れてる。別に恥ずかしがることじゃねえだろ？」

そう言いながら、音二郎さんの長い指が私の頬にそっと触れ、耳にかかった髪の毛をかき上げた。

「……それでも、恥ずかしいんです。誰よりも一番近くで観たいのは、もちろんなんですけど」

*

「……はっ。いつも一緒にいるのに、おまえってやつは、たまによくわかんねえことを言うよなあ。じゃあ……今のうちに慣れとけ」

「っ……」

くすぐったそうにする私の反応に、音二郎さんは満足そうだ。

「これぐらいくつついときゃあ、明日はきつと余裕だろ？ いいか？ ちゃんと目をそらさずに、俺を見てろよ。もし、よそ見をしてたら……。さあて、どうしてやろうか」

音二郎さんは私と視線を合わせ、くすりと笑う。彼の熱を帯びたまなざしを受け、身体の芯が熱くなる。

「……おまえは、どうしてほしい？ ほら、言ってみろよ」

問いかける声は、ひどく甘くて――

「いいか？ 明日の舞台が終わったら、俺は真っ先におまえのもとに駆けつける。そのあとは……、朝まで2人つきりだ」

「……っ……」

ゆっくりと触れた唇。ただ触れただけの口づけなのに、全身が優しく痺れた。

「俺がおまえを迎えに行くまで、俺にどうしてほしいか考えとけ。ちゃんと俺にお願いできたら、そのとおりにしてやるよ。……いいな？」

「……はい」

「よし……いい返事だ」

誰よりも音二郎さんに近い、この場所。この腕の中が、私の特等席だ。

）
F
I
N
（